

テララカッ!

第九回 奈良県大和郡山市・久松寺

約九〇年前に倒壊し長く空き寺となつたお寺の再建と、そこから始まつた老若男女が和気あいあいと笑顔で集まれるようになった「空手道場」のお話を、奈良県妙光山久松寺住職の丸子道仁師にお聞きしました。

—お寺で空手道場を始めたくきっかけを教えてください。

丸子道仁師 奈良県大和郡山市にある久松寺は昭和九年の室戸台風によりすべて倒壊し、それから長い年月に渡りお墓だけが残っている状態でした。平成二〇年に私の師匠がご縁をいただき、本堂を再興させていただくことが

できました。外観は公民館に近い近代的な様相で、あまりお寺らしくないのでしたが、そこから久松寺のお寺としての活動が再出発いたしました。当然ながら初めのうちは檀信徒の方々が少ないお寺でした。スポーツクラブで仕事をしながら、また他所での空手道場を続けながら生計を立てつつ、少しずつ活動を広げていました。

そんな中ご縁あって、平成二三年から全国曹洞宗青年会へ出向し、全日本仏教青年会特別委員会として東日本大震災復興支援ボランティア活動や国際交流プログラムなどに参加させていた



久松寺住職 丸子道仁師

できました。その活動の中で海外の仏教者と日本の仏教者の違いや、日本の仏教者に求められるものについて多くを考える機会をいただきました。

あるとき、海外の仏教信者の方から、日本の僧侶が長靴を履いて災害時ボランティアに駆け回る姿や、街に出て様々な仕事をしながら地域と関わっている姿がとても新鮮で好印象である

ことを聞きました。私の中でそれまでありました日本僧侶の俗っぽさに対するコンプレックスが、実は胸を張るべき側面もあるのだと教えられました。

布教活動はもっと自由でいいのかもしれない、そう思えたきっかけでした。久松寺の本堂は樫の板間であったこともあり、そこに四センチの分厚いマットを敷き詰めてお寺でも空手を教えるようになりました。本尊十一面観世音菩薩さまの前で、子どもたちと大声で気合を入れたり、汗だくになって飛んだり跳ねたり、泣いて笑って修行することが始まりました。

—なぜ空手道を選んだのでしょうか？

丸子師 たまたま私ができることが空手道だったことは大きいです。多くの人は空手道のイメージとして「痛い」「きつい」「しんどい」と思っています。これはあながち間違っていないのですが、だからこそ、そこを乗り越えて前に進むこと、心身共に強くなるこ

とに価値があると考えています。空手道は姿勢や呼吸を大切にしています。

姿勢が悪いとすぐにバテてしまい、連続した動きの中で次の動作へと繋がっていきません。上手くいかないときに何故なのか考えてみると、姿勢が悪かったことに行きつきます。

呼吸は相手からダメージを受けたときに、体に溜めずに外に出すために重要になってきます。このことは、坐禅とも非常に親和性が高くなじみやすいところでした。稽古の前後には各三分ほど坐禅を行っています。初めは坐禅会に繋げるための空手道としてスタートしましたが、今では違和感なく両立して続けられています。

—住職として檀務などと両立して継続することは大変なことかと思いますが、年数や生徒数、練習の頻度など教えてください。



丸子師 空手道場を始めた二年ほどは五〇〇人程度の生徒さんしかおりませんでした。三年目くらいから口コミで広がり、大きく生徒数が増えました。今年で一三年目となりますが、今は五〇人程度の生徒さんがいます。練習は火、水、木、金曜日に行っていますが、お通夜と重なることもよくありますが、生徒さんたちにはご理解をいただいているので、よく変更させてもらっています。

さらに以前は月に一度、土曜日の朝



に坐禅会をメインにして空手道、そして粥を食べる「朝がゆの会」を開いていました。こちらは道場の生徒さんの

参加に加えて近くの大人の方々も多く参加してくれていました。大本山の朝の行事を模した、プチ修行のような内容ですので、浄人も参加者が行っていていました。しかし、新型コロナウイルスの影響で、飲食関係のイベントということもあり開催できなくなりました。また再開できたらいいなと思っています。

—空手道の稽古の他にも道場の生徒さんや地域住民の方々と、様々な活動がされているようですが、「報恩作務の日」について教えてください。

丸子師 お寺が再興する前から年に一度、墓地を管理されていた長老さんたちが、お寺に集まり境内の清掃をされてきました。そこに道場の生徒さんたちも加わり、今では一緒に取り組んでいます。

道場の生徒さんたちは久松寺のお檀家さんではないので、墓地におられる仏さまとは直接の関わりはありません

ん。しかし、古くからこの場所に久松寺があり、一度すべて倒壊してもお寺が存続し、再興することができたことは地域の仏さまの尽力があってこそ、ということ。そして、昔から繋がられてきたご縁があって、久松寺で空手道を今習えることを当たり前に思わずに、大事にしてもらいたいと思っています。見えぬ力やつながりが、回り廻って自分の力になってくれると思いますので、報恩作務の日をきっかけに感じていただきたいです。

清掃が終わったらお楽しみ時間も用意しています。夏に報恩作務の日に行っているので、流しそうめんや夕方からは花火を楽しみ、地域住民と道場の生徒さんたちとの交流の場所にもなっています。

—新型コロナウイルスの影響で取り巻く環境も大きく変わったと思いますが、どのように対応されましたか？

丸子師 先ほどお話しした「朝がゆの

会」は中断になりましたし、他にもコロナ最初の一年目は大会や演武会など何もかも無くなりました。二年目くらいから大会は開催されましたが、マスク着用の制限がありました。最近ようやくマスクも必要なくなりました。私の道場では「組手」と「型」の両方を教えています。新型コロナウイルスの五類への移行に伴って直接組み合わない「型」を披露する演武会が少しずつ戻ってきました。近くの介護施設やケアホーム、企業や神社などとのつながりも取り戻していけると思います。

―演武会とはどのようなものでしょうか？

丸子師 神社では玉串を納めてから奉納演武をさせていただき、企業では毎年夏まつりを開催していて、そこで演武を披露してもらっております。

型の奉納や子どもたちによる板の試割り、楽しい寸劇なども行ったりします。型にはそれぞれテーマがあるの

で、子どもたちの演武に合わせて説明をしています。歴史の長い空手道ですので、型にあるテーマも人それぞれに解釈の仕方がありますが、その中でも「観空」と呼ばれる型には仏教に通ずるものがあると感じています。「観空」は手を広げた後、額の上で手を輪の形に作るところから始まります。その輪を通して空を見上げたときに自分の小ささを感じ、今まさに様々な縁の繋がりによってここにいることを確かめることができます。私の中では特別な型なので、演武会では最後に自分で披露させていただいています。

―空手道場を通して地域の輪が広がっていると思います。今後の展望や目標について教えてください。

丸子師 大人が少ない道場ですが、七年継続してきて長く通ってくれている子どもたちは大人となり、その子たちもだんだんに社会人となり中には親となる人もいます。彼らが大きくなっ



たときに地域に根付き、地域を見守って
くれるような体制を作れたらいい
な、と思っています。

続けていますと、道場に通っていた
子どもたちが様々な悩みを抱えて立ち
寄ってくれることがあります。僧侶と
して傾聴もしつつ、道場の元生徒に
は、ミットを持って共に汗をかきなが
ら私のスタイルで対話をしています。
道場は辞めたけれども相談に立ち寄っ
てくれたことで、私自身も人と人の
繋がりを実感し、道場を長年継続でき
ている原動力になっています。

（聞き手・文構成）／

全国曹洞宗青年会副会長 高柳龍哉

プロフィール

妙光山久松寺住職 丸子道仁

駒澤大学卒業後大本山總持寺安居。

平成二四年住職となる。

空手道M A C奈良郡山道場責任者。

【久松寺ぎぜん塾】

空手教室（毎週火水木金）

朝活同好会（夏休み・冬休み）

お寺でカポエイラ（毎月一回）

花まつり演武会（年一回）

報恩作務の日（年一回）

ともしび地藏演武会（年一回）

ハロウィーンカラテ（年一回）

朝がゆの会 秋ごろ再開予定